

令和6年度第1回小田原城天守等復元的整備検討会議

- 1 日 時 令和6年7月10日（水）午前9時30分から午前11時15分まで
- 2 場 所 小田原市役所 6階 602会議室
- 3 出席者 鈴木委員、古川委員、櫻井委員、岩越委員、宮本委員
岡委員、諏訪間委員、大貫委員、小林委員、大島委員、伊藤委員

【開会あいさつ】

【資料の確認】

【会議公開の確認】

議事

- 1 審議事項 （1）天守の建替に係る調査研究等について

櫻井委員：今日は少し視点を変えて、まず初めに、この天守建替というものを最終的に市民に対して、強く広く訴求をしていかななくてはいけないと思っているが、市民への広がりを作るための活動について、話しをさせてもらえたらと思うのが1点ある。もう1点は、添付資料をつけてもらっているが、これは、これまでこの会議で色々議論してきて、天守建替にかかる諸々の色々な調査業務であるとか、関連の動きであるとか、そういったものを俯瞰できるような形でまとめた表である。これについては、市民活動のところをやった後に、皆さんと意見交換させてもらえたらと思う。市民活動については、我々のNPO法人では、設立当初からこの市民活動をしばらくやってきてはいたのだが、お城の研究を始めた時から、資金的な問題もあり、しばらく市民への木造建替の普及活動というのはストップしているような状態であった。我々のNPO法人の資金繰りのところも多少変わってきたというところもあり、また、研究を始めてある程度の成果が見えてきて、今まで全く見えてこなかったゴールがなんとなくぼんやり見えてきたのかなという状況で、市民の方々に新しくお伝えすることも結構あるだろうというところがある。また、皆さんの机上にも毛利和雄著「名古屋城・天守木造復元の落とし穴」の本があるが、この名古屋城の話もあたりというところもあるので、こういう本が出るということ自体、内容はさておき、今の日本の中でお城の建替が起こっていると、社会的にも認知されつつあるというような状況で、我々としても考えながら市民にアピールをしていこうという形で今考えている。それについて、1つ今、後藤先生からは、この会を中心にシンポジウムのようなものを開催して、そこに色々な先生方をお呼びして、我々も勉強するし、他地域での動きと

いうものについて市民の方にも知ってもらい、そのようなシンポジウム的なものが今年度中に開催できればいいかなというような、ラフではあるが、アイデアも出ている。この点に関して、後藤先生一言お願いしたい。

後藤アドバイザー：本の著者の毛利和雄氏は、木造復元に反対派である。コンクリートでいいという派である。これに対して、服部英雄先生という元文化庁記念物課の史跡部門の主任調査官、九州大学教授、名古屋城や熊本城の城郭センターに3月までいた日本史の研究者の方は、この本を読んだ感想で、「この本をいくら読んでもコンクリートを木造化してはいけないのかが、まったく分からない。自分は子供のころから名古屋に育ってきて、絶対に木造がいい」とストレートに述べられている。学術的なことも完全に押さえた中での意見なので、興味深い。服部先生はごく最近「天守閣砲台起源説」を唱えている。今までは、物見やぐらと御殿を重ねて天守ができたと考えられていたが、それだけではなくて、高い所から大砲を撃つということを考えていたのではないかという新しい説を出されていて、そういうこともとてもおもしろいと思うので、色々な事も含めて、服部先生がなぜ名古屋城は木造の方がいいと思っているのか。天守に関する新しい学説とか、名古屋城・熊本城とおられたので、全国的な位置から見た小田原城の話も含めて聞けるととてもおもしろいのではないか。僕自身も服部先生の話を知りたいと思っているので、候補の一人は服部先生である。もう一人は、もう了解を得ているのだが、東京大学名誉教授で、東京藝術大学特任教授の藤井恵介先生である。史跡上の再建を含めた史跡上の活用に関する文化庁の委員会の座長である。藤井先生に頼んだ時に、小田原のことではなくて、日本の史跡全体の中で活用を進めるといふ新しい方針が出されたので、その解説を含めて話すことであれば、ということでは了承を得ている。その中で小田原城でこのような研究が進んでいるので、その方向に合っているかどうかという質問すれば答えていただけたらと思うので、藤井先生からは、史跡の新しい活用の方向、これ実は天守だけでなく、小田原城跡全体にとっても関わってくる話かと思っているので、そのお二方は有力な候補で、市民にも聞いてもらいたいし、我々も聞いて勉強したい。あと一つやればいいなと思っているのが、木を使うことの意味をもっと市民に知ってもらう必要があって、小田原城の中で色々なお祭りやっているが、おでん祭りとか北條五代祭りとか。そういうときに仮設の物が作られると思うが、仮設物を木を使って、小田原産材を使って作れば、もっと木を使うことのアピールができるかなと思う。昔、板橋地区のこどもたちにも、芹沢さんたちと一緒に子供達と夢の天守を描いてもらってかまぼこ板の端材で作ろう、とやったが、それだけではなくて小田原産の木を使うということの意味を乗せてやってもらうこともいいかなと思う。今年ではなくても、それはありかなと思う。ついこの前、渋谷の公園で見てきたの

だが、イベント用の木柱を立てやすくするために、数十 cm のポールを立てる仕込みの穴を入れておくと、組み立てたり分解したりするのがすごく早い。結局、イベントの仮設物は風でやられてしまうので、基礎固定というか地面固定できないので、中止になってしまうのだが、その小さな穴をある一定区間内にやってあげるだけで、めっちゃめっちゃやりやすくなる。渋谷だけではないが、色々なところで公園の指定管理制度がはやっていて、パーク PFI で民間に公園管理してもらいかわりに稼いでもいいと、そうすると仮設のものでイベント開催するのがいちばん効果的かつにぎわいもつくれるいい方法なので、それで日建設計がそれを試みている。小田原の城下もそういうものであれば、遺構面に行かない範囲でつくれるので、文化庁の許可を得るのも難しくないだろうし、日ごろイベント行事が悪天候ですぐ中止になってしまうのがかなりの確率で、よほどの台風は駄目だが、通常の雨風くらいなら飛ばされずに済むというのもあって、その仕組みは今年度一度聞いてみてもいいと思う。地域の森林資源を有効に使おうということと、公園を民間の知恵入れて楽しくしようということは共通の課題である。小田原城はすでに民間の知恵を入れなくてもいろんな祭りで賑わっているが、そういう場所で、木でやるのが今の時代求められていて、そういうアピールの場になると、再建につながるのではないかなと思う。

櫻井委員：後藤先生、具体的にシンポジウムみたいなものと言った時に、今、名前が出た服部先生と藤井先生に打診をして、それぞれご講演という形で1時間半とかか。

後藤アドバイザー：講演してもらい、我々が宮本委員中心に研究した資料に講演前に目を通しておいてもらって、できれば講演の中でふれてもらい、それが難しいなら我々があとで質問するとよいのではないかなと思っている。

櫻井委員：そうすると、それよりも重要なのは、講演の後に少し小グループで、その2人の先生を入れて何か話ができる場があった方がいいという感じか。

後藤アドバイザー：それでもいいし、市民の皆さんに全国的な研究をされている2人の先生から小田原のこれまでの取組の成果を評価してもらえればいいと思っている。そうすることで、これまでやったことが無駄ではないと思ってもらえるのではないかなと思う。

櫻井委員：そうすると、藤井先生の方はどちらかというと史跡全般に関するという意味で言うと、宮本委員の論文もそうだが、小田原市の方で持っている史跡小田原城の整備計画的なもの、藤井先生にも見ていただいて、当然大きな史跡整備計画の中の天守の建替ということになってくると思うので、そういう大きなスケールでものを見てもらおうというふうになるか。

後藤アドバイザー：そうだ。小田原城に特定して話すのはできないけれど、全国の話ならやれる。全国のことと質問しその中で答えるのは大丈夫だと言っていた。

櫻井委員：服部先生に関しては、地元の名古屋ということで、木造で天守をやっていくことを結構サポートされてる先生だと思う。少し具体的に、どちらかという天守の木造ということにフォーカスした議論になりそうだ。

後藤アドバイザー：名古屋のことも教えてもらいながら、小田原が進めている研究が、歴史の学者である服部先生が目で見たら、どのように見えるか、が知りたい。

櫻井委員：今の話の中で、小田原市の方から何かざっくばらんな意見とか、どうせならこうということもやったほうがいいとか、そういうのがあれば、ありがたい。

大島委員：服部先生が来た時に、諏訪間委員は会っているか。最近来てると思ったが。

諏訪間委員：会っていない。最近来たのか。

大島委員：2年ぐらい前か、服部先生が来られた。元々文化庁の時代は現状変更の関係で銅門復元頃までは、小田原市を担当されていた。いろいろお世話になった。最近来て話をしていただしたのは、小田原城も随分良くなってきたね、と言っていた。そういう評価ももらえるが、でもここをもうちょっとこうやれば、とも言っていた。参考にずっと見ているようだ。

諏訪間委員：服部先生が一番詳しい。熊本城の地震の被害を受けた後にずっと真ん中にいた人である。またその後、名古屋に行って3月まで名古屋城にいた。

後藤アドバイザー：今は、リタイアしてフリーになって時間ができたとフェイスブックに載っていた。

諏訪間委員：何年か前に沼津でシンポジウムがあった時に一緒に登壇してお話をさせてもらった。

後藤アドバイザー：そういう方なので、市のどなたかが登壇されて話をしてもらうのも全然いいと思う。

諏訪間委員：中身はともかく、どういう枠組みでやるのか。市の主催でやるのか、NPO法人主催でやるのか。この会合が主催となるのか。会合が主催というものも変な話である。その枠組みをどうするのか。あと会場の問題。ネタ的には三の丸ホールの小ホールぐらいでやってもおかしくないような人選だと思う。藤井先生と服部先生をお呼びして、僕の個人的な案としては、宮本委員にきちんと今までの調査成果を、少なくとも何十分か発表して、市民も含めて、興味のある人に見せたい。できることなら、その部分も論文のダイジェストをそこで印刷をして、冊子とするのが一番の理想だと思う。どういう風にやるのか。そこが一番問題だ。率直な意見を言った方が良い。

小林委員：率直な意見としては、シンポジウムのテーマがどうなるのかによって、市の絡み具合がどうなるのかが分からない。テーマが天守の木造化だとしたら、市としては今、天守の木造化を目指しているわけではないので、乗りづらい。NPO法人

がNPO法人の活動としてやるのなら、それはもう全然やっていただいて問題ない。

宮本委員：藤井先生からは一度断られている。NPO 法人の声掛けでお願いする講演に関しては辞退されている。

後藤アドバイザー：小田原城天守木造化だと藤井先生はノーで、史跡の新しい活用の方向性なら問題ないとのこと。

小林委員：なので「天守の木造化」と思いきったテーマではなくて、「史跡の活用における復元的整備について」とか、そういう話の中で、例えば天守の建替についてはということなので、シンポジウムの中で議論が出るのは、それはありだとは思う。あと、私は事務屋なので、細かいことを言うと、謝礼金はどうするのかとか、会場は今から三の丸の小ホールは人気があって、今年度押さえるのは、少し厳しいのではないとか。司会はどちらがするのか、とかの細かいところは気になる。今から例えば今年の秋にやりたいと言っても、ちょっと今からだと駆け足すぎる感がある。「やってはいけない。」と言っているわけではなくて、実際にもし市が絡んでやるとなったら、多分うちの係がやることになると思うので。そうすると、色々考えて、スケジュールとお金と場所を押さえる必要がる。今、市役所内部の予約について言うと三の丸ホールについては、市役所が使うためには2年後の日程で先行予約ができる。

鈴木委員：現実的には年明けぐらいにどこか取れそうか。1月、2月ぐらい。

小林委員：入場可能人数が何人かにもよる。300人規模の小ホールは1年は無理だ。

岡委員：あとは曜日とかにもよる。平日でもいいとか夜でもいいと考えると選択肢は広がる。

小林委員：例えば何人講演して、シンポジウム何人やるからトータルで何時間だとか、それはこれからだと思うのだが。そうすると、いつやるとか、そういう話になる。ある程度そのシンポジウムやりたいねという意見はすごいよくわかるが、その細かいところが決まってくないと、実際のところに落とし込めない。あとはよろしくと言われても、それは困る。

櫻井委員：やっぱり今一番、もしもこの会議で今日何か議論するとしたら、まず今小林委員が言われていた、「どこが主催するのか、はたまた共催なのか」ということ、今小林委員の意見を聞いていると、それに関連して、やはりシンポジウムの大きなテーマみたいなものというのが市としては動きに関連してくるという話があったと思う。そのテーマを史跡小田原城跡の未来みたいな形で、簡単に言うと他地域の史跡整備の事例について学ぶというようなことで、その中に小田原城の現状、史跡整備の現状ということで、論文を書いているのは事実である。それに關しては、木造化をするしないというよりも、調査の一環としてこういうことをや

っているというのを発表するという、タイトル自体をあんまり漢字をいっぱい並べて、すごくこう、イメージを固定化するよりは、ざっくりとしたものにした。今、我々の会議体もざっくりとしているし、ゴールというものをざっくりとしているので、シンポジウムのタイトルもざっくりとしたものにした場合に、小田原市の今の段階での小林委員としての率直な反応というのはいかがか。

小林委員：史跡の整備について、市民の皆さんにお伝えするというのはとてもいいことだと思う。だが、その中で天守の木造化という狭いテーマでやるのは無理がある。やるとなったら、史跡小田原城跡の今後の復元についてとか、今後の整備の内容について、みたいな話で組み立てていくのがいいのではないかと。先生から例えば全国の事例を教えてもらうとか。小田原城の整備に大変なお金がかかっている中で、市民の理解を得るためには、そういうのは有効な手段の1つだと思う。

後藤アドバイザー：あとは、天守復元のカラーを少し薄めるが、よその自治体では城泊とか言って、城とか櫓を宿泊施設に転用して観光活用しようみたいなものがある。例えば津山市は、復元した櫓、いわゆる銅門のようなものの中を宿泊に使えないのかと検討している。いろんな活用があると思う。先ほど言った小田原城の中でお祭りを開催するのはすばらしいお城の活用だと思っている。小田原はそういうことをちゃんとやっているということを含めて、やっている祭りがもうちょっとその期間に学びもあったほうがいいのではないかとかいう話ができるのではないかと。天守の木造化は、当然史跡の活用の大きな方策の一つではあるけれど、整備計画の中に位置づけなければいけないと考えると、整備計画そのものが非常に大事であって、その中に建物の復元はごく一部でしかなくて、史跡公園全体をどう活用していくかということがとても大事な話だと思って、そういうところも知ってもらったらいいいのではないかと思う。

櫻井委員：一般の人に、やっぱりこの日本という国を考えた時に、こういうお城がある、そういう歴史的資産があるということをもっと若い人も含めて、広くやっぱり認識してもらって、これを後世に伝えていくために、我々は今、城に対して何をしなければいけないのか、どういう風に考えなければいけないのかというのがすごく大きなテーマとしてある。そのテーマを考える上で、今回お2人の先生に色々事例を持ってきてもらって話を聞こうというのが1つ大きなところである。この小田原城の木造化に関しては、僕はシンポジウムの中というよりは、その前なのか、後かで、この会議体に少し個別に来てもらって、具体的なところというのはシンポジウムと違うところでやるという形にすれば、小林委員の懸念もだいぶ薄まるのかなという気はしている。もう1つ、今話聞いていてぱっと思ったのは、やはりとにかく小田原市にしても、小田原市民にお城に関心を持ってもらいたいというのはすごくあるところだと思う。やはり関心を持ってもらう、すごくス

トレートなやり方というのは、やはり数字だと思う。その時に、小田原城の史跡整備として一体これまで累計でいくらお金を投入してというのが、多分市の方もご存じないかもしれないが、それ1回出してもらおうと、今まで小田原は、これだけ何百億というお金をつぎ込んでいる、それだけ重要なものなんだから、もっとみんな関心持ちましょうよというのは、すごくこのシンポジウムを機に市民に対してのメッセージになるような気がする。

小林委員：そこは諸刃の剣だと思う。

櫻井委員：もちろん。だから数字にもよるが、でも僕自身もそういう数字を把握していない。少なくともこの会で今までいくらつぎ込んできたのかということではまずは分かって、その数字を見て、いやいや、この数字じゃちょっと、小林委員が言うようにあまりにも我々と小田原市にとってもネガティブなことになっちゃうよねって言うのだったら使わない方がいいと思う。今こういうラフな会議で、アイデアとして1つ、そういう数字をまずはこの会の中でつまびらかにして、使えるものなのか、使えないものなのか、1つのアイデアとして検討していくというのはいいのかなと思う。この会議の中で1回咀嚼して、上手にどういう風に使うのか。使えるのか、使えないものなのか。

諏訪間委員：ざっくり考えて、200億円以上は使っている。そして、史跡の公有地化だけだってもう何十億円は使ってるし、小田原城の関わる発掘調査、例えばミナカの所だって10億円使ってるわけですよ、発掘で。そうやって足していくと、発掘で200億円。要するに200億円とか300億円がトータルではかかっている。それはあえて集計してない部分もあるし、集計しにくい部分もあるし、だけど、それを還元はできてない。市民に対してそれだけの税金や、あるいは民間の要するに事業者、業者負担で、発掘経費を出してもらったやつが、博物館がなければそれを展示する施設がごくわずかしかない。それは本当はきちんとした方がいいかもしれないと、個人的には思う。

櫻井委員：今、諏訪間委員がすごくいいこと言っていて、やっぱりこれだけつぎ込んできて、発掘調査をやってきて成果は上がっている。だけど、それを市民の方に還元するべきがない。その還元する手段の1つが、例えば簡単に言うと博物館であったりするところはあるが、たくさんお金を使って、でもその発見したものが眠ってる状態なんだということを、市民に分かってもらう必要がある。

諏訪間委員：だから、何かにつけてそういうことは訴えている。あと新聞記事にも出ている。収蔵庫問題とかね、出ているが、進まない。

櫻井委員：そこで重要なのが、私が言っているのは、広告を出す時にもやはり数字だと思う。数字があるかないかでは、やはり訴求力が全然違う。今回の例えば300億円を今まで使ってきているという、その300億円が1人歩きしてしまう可能性もある

るが、でも、市民の関心を得るには、やはり数字というのは、すごいうまく使えば効果があると僕は思っているの、一旦この場で、その数値がどんなものなのかというのを、みんなで考えてみてもいいのではないかとは思う。

後藤アドバイザー：別の言い方をすると、具体的な数字はともかくとして、文化財保護で税金をつぎ込んでみんなが納得できる文化財と納得できない文化財にランクがあると思っていて、川越で時の鐘につぎ込んで文句言う人は誰もいないと思う。小田原城は、そういう風になっているかということ、本来そうあるべきと思うが、そこは天守も木造化にもひっかかってくる。公園としてはみんな親しんでいて、小田原はお城あつての小田原と思っているけど、誇りをもって外に発信しているかというところが微妙かなと思う。実は市民より津山とか外の人の方がよほど評価している。総構の土塁すごいよね、とか小田原市民が言わないことを発言するわけだ。その辺がすごいギャップを感じる。一方で、近代建築の活用も他の市の人はずばらしいと言っている。そういうことが市民に伝わってなくて、もったいないと本当に思う。

櫻井委員：このシンポジウムをやる時に、僕のアイデアとしては、小林委員が一番懸念していた小田原城天守の木造化というものは、僕は第二部的な扱いで、この2人の先生から、それについて具体的な意見をきくのはこの少人数グループでやる。ただ、その前段で、小田原市の主催で例えばやると言った時には、テーマとしては、小田原城の木造化ということではなくて、今言ったような、やっぱり日本の文化資産としてのお城というものの整備を考えようというものがいいと思う。それだと後藤先生が言っていた城泊みたいなものに近いようなテイストになっていくのだが。そういう形で、小田原市が今やはり名前を出しづらいということは内部的な話にして、ただ、この2人の先生から話を聞きたいと思う。後藤先生が言ってくれたように、宮本委員が書いてくれた論文を事前にお渡しして、それに対する評価みたいなものを聞ければ嬉しいと思うので、それは別に時間取るとして。ただ、シンポジウムとしては、やはり1つの目標は、やはり市民に小田原城に関心を持ってもらうというのが1番のテーマだし、1番の目標としてシンポジウムをやるという方が僕はいいと思う。そういう建て付けでいけば、まずそのシンポジウムに向けてみんなが前向きにアイデアを出して詳細を固めるという方向にみんなが前向きに進めるのかなと思う。いかがか。

後藤アドバイザー：お二人同日だとすれば、藤井先生は小田原のことは話せないの、国の委員会として史跡の活用の解説をしてもらえばよくて、服部先生は小田原城を含め、お城に詳しいので、小田原城の魅力とか素晴らしさはどこなのということ、服部先生なりに見た時に、服部先生なりに将来の史跡整備とか活用方法を自由に語ってもらえれば、その中に天守の木造化は入ってもいいし入らなくてもいい

し、それでいいのではないかと思う。そうすると市民シンポジウムになりやすいと思う。

岡委員：木造化を目指して、それを市民に知っていただくのは、厳しい。だからスタンスとしては、要はこれからの史跡整備のあり方を考えようというのがあって、その可能性が他の先進事例とか含めてどんなものがあるか、というのを市民に知ってもらい、今後どうしていったらいいのかというのをみんなで考える的な場にするというのが形だと思う。こちらの意図があって、それを市民に賛同させるためにやるというのが見えないような形で、どちらかというとは実はこんな可能性があるということを知ってもらって、みんなで盛り上がっていくのに持っていくための位置づけにするといいいのではないか。

鈴木委員：大体その辺の柔らかさというのは理解できるが、ただ、やはり私らは色々な町の人と接触していると「実際にできるの？」と、必ず聞かれる。結局可能性が濃ければ、俺たちいろんな寄付でもなんでもしやすいよ、と。「そこははっきりしなかったら手伝えないよ」と言うのが、あらかたの市民感情である。今、岡委員が言ったように、ソフトにまとめてくればいいが。もう1つはやはりその宮本委員がやってくれたその研究報告をきちっとして、その部分は、木造の可能性みたいな、可能性を今検討しているみたいぐらいの言い方で、もう1本突っ込めないのかなと思うのだが、どうか。

小林委員：可能性まで踏み込むのは無理だと思う。例えば、アイデアレベルだが、NPO法人が主体で、例えば名古屋城と広島城の先進事例、広島にも市民団体が設立されているから、そういう方たちを呼んで、その名古屋城と広島城の木造化について話を聞いて、市民団体として今後どうしていくかみたいなシンポジウムをNPO法人がやるのは、いいかなと思う。広島は市長が木造化と言っている。名古屋城は文化庁もオーケーを出して木造化することは決まっていて、ただ細かいことで今つまづいてるだけである。

櫻井委員：宮本委員の研究は、研究のテーマとしては何も別に天守の木造化について議論をしているわけではなくて、今現存する木造の模型についての調査研究している。だから、そこをちゃんと伝えて、近年小田原で進んでいる小田原城の木造模型の調査研究についてということで、そのシンポジウムの中に1本入れるのは、私は何もおかしいことではないと思う。

諏訪委員：それはやるべきだと思う。

櫻井委員：逆にそうだと思う。

小林委員：その調査を今やられているのはNPO法人だと思う。NPO法人がそれをシンポジウムで発表するのは全然いいと思う。

櫻井委員：ただ、シンポジウム自体の建て付けをどうするかというところもある。やはり

我々NPO 法人としては、広く小田原城について市民に関心を持ってもらうには、我々NPO 法人というよりは、小田原市が主催、もしくはNPO 法人はそこに共催という形か協力かの形の方がいいのかなと私は思っている。しない方がいいか。NPO 法人の名前を出さない方がいいか。

鈴木委員：いや、逆にNPO 法人が主催か、または小田原市と共催で行くか。そんなに後ずさりする必要はない。共催というのは、あり得るのか。

小林委員：共催だと小田原市がNPO 法人と同じ方向に向いているということになる。小田原市は、天守木造化を表明していない、今でも。新市長は、天守の木造化の検討の継続とmanifestoに書いている。検討の継続はやるというのは、市長が言っているなので、それは全然構わない。天守の木造化になると、それはだいぶ大きく方向が違ってくる。NPO 法人の主目的は天守の木造化だと思う。そこがシンポジウムをやる。そこに小田原市が乗っかるということは、NPO 法人の主目的に乗っかることになる。それはできない。今考えられることとして、市としては、後援名義だと思う。

岩越委員：木造にするということをテーマにするのではなくて、小田原城の史跡整備、今までやってきたことに対して、ちゃんと市民に知らせることと、将来どうするのだという中に、私は、職人とかその地域の材をどうやってそれを使っていくのかということが大事だと思っている。例えば入札にしても、ちゃんと地元業者を指定することが、大事だと思っている。職人が、もう確実にあと10年後、芹沢棟梁だって60、70歳だ。若い人を育てる必要がある。天守木造ではなく、今やらなければいけないことは職人を育てることが私の最大のテーマだ。

小林委員：後藤先生がおっしゃるように、史跡整備と活用の話の中に、復元的整備として建物があり、小田原城では、復元として銅門、復元的整備として馬出門をやっている。今後、例えば南曲輪の整備で櫓を建てるとか、そういうことも可能性はある。そういう時に職人が必要だというような話を混ぜ込むのはいいと思う。岩越委員が言うように、天守の木造化ではなくて、小田原で自前で職人の確保とかその育成とか、今後史跡整備をやっていくには、そういう木材に関する産業がしっかりしてないとできないというのを混ぜ込むのはいいと思う。それはできると思う。しかし、鈴木委員が、その後天守の木造化の話をしたという話になると、市は、関わることはできない。

後藤アドバイザー：今、この会議を開催しているわけだから、天守の木造化という結論ありきではなく、小田原城天守に関して、最近こういう観点で宮本委員のこういう研究が進んで、江戸期天守の実態像がこれくらい分かった、というのを市民に伝えるのは市がやるべきだと思う。

小林委員：そうであるならば、今年度、委託で天守の研究をやる。今契約の事務を進めよう

としている。NPO 法人からは調査研究に3年間という話をもたらしている。だから、宮本委員に調査研究を3年間やってもらい、その報告書を作成する段階で、研究成果のシンポジウムをやるとするのは、あり得る。

後藤アドバイザー：私はそれでいいと思う。木造化についてコメントもらうよりも、宮本委員のやっている研究が、例えば藤井先生でいうと国が許認可する方向の資料として使えるという言い方で大丈夫だと思うし、服部先生でいうといい研究だ、信ぴょう性があるという話をもたらすだけで、そのレベルで十分だと思う。その辺は、事前の打ち合わせで、そこまでのコメントでいいと打ち合わせておけばいいだけの話である。そのようなレベル感かなと思っている。むしろ私が思うのは、岩越委員も言われているけれど、天守だけでなく総構を含めた小田原城全体を小田原市民が誇りに思ってもらえるように、やっている事業が単にお金かけているだけではなく他の目的にも有効に活用されるという話が出るという気がする。

櫻井委員：話の視点が少し違うが、基本的には、国土交通省も農林水産省も環境省も、文部科学省は分からないが、公共建築物においては基本的に木造で建設するというのは、もう法律で決まっている。小田原城も基本的には公共建築物になる。国がそういう指針を出していて、公共建築物は木造で建てろと言っている中で、その公共建築物である小田原城の木造を語るというのは、別に他の省庁から見れば何もおかしいことではないという気はするのだが。

小林委員：他の省庁とか関係なく、市がどうするかである。市がどういう姿勢で臨むのかだと思う。市政の姿勢として、今の市長が言っているのは、天守木造化の検討の継続である。その方向性で今はやる。前の市長が作られた総合計画にも天守の調査研究が令和12年度までの計画としてある。この計画が今後どうなるかわからないが。新しい市長が総合計画を作るという話になった時に、そこにどう入るかで、市の姿勢が決まる。その市の姿勢に沿って市がシンポジウムをやるとするのは、ある。

櫻井委員：でも、市というのは国の一部だと思うが。

小林委員：地方自治がある。市の考えがある。

櫻井委員：ただ、国全体として木造で公共建築物を作るという法律がある中で、その木造という言葉を出すことに対して、市の姿勢があるというのは十分分かってはいるが、あまりアレルギーを感じなくてもいいという気はする。世の中一般的に公共建築物を木造で作るという流れがある中で、まず1つは天守も公共建築物であるというところがあれば、当然その公共建築物の構造を検討するというのは、当たり前の話だと思う。今の時代の流れでいくと。他の省庁が決めているその指針でいくと。なので、そこに対して、木造ということを使うのがリスクになるのかということを一瞬思ったのだが。

小林委員：リスクというか、今、市の方針では、天守の建替えが重要政策に上がってるわけではない。天守の木造化という話になると、100億円とかそういう単位の予算の話になる。今ここで出すタイミングでないと思う。

櫻井委員：木造化がどうこうというよりも、その建替えということが議論になってはいけないのが、1番の懸念か。

小林委員：建替えがというか、その建替えが今、喫緊の課題なのかという話である。

櫻井委員：建替えの時期に関連するのがいけないという話か。

小林委員：いけないというか、それをやると、その建替えとか木造化とか話をするのは、市民が、市はどう考えているのかという話になって、混乱というか、様々な意見が出てくると思う。そこで議論がかき乱されるというか、混乱するのが怖いと思う。

岡委員：単純に延命でいい、という意見は出てくる。

小林委員：延命の方が安上がりという意見が出てくる。

岡委員：コンクリートの再アルカリ化をやればいいという意見は出てくる。

諏訪委員：市としては、もう御用米曲輪の整備を、馬屋曲輪の整備が終わった後、もう10数年ずっとやっている。発掘をして近世の表面表示をして、今また平場部分の戦国期の整備について、発掘調査をしている最中である。もう14年ぐらいやっている。それが市としての文化財課としての重要な中心となる仕事である。だから、天守の木造化の検討、研究は一応位置付けて、こういう会議体もあるし、予算も今度取れたので、それはそれでいいが、要するに、シンポジウム自体はやる必要性もあるが、正直なところ、今、市で手を挙げて、さあやろうという風にはならない。だから、やはり数年間やってきて、市民に対してここ数年間、NPO法人が普及啓発的な事業をやっていないとすれば、NPO法人が主催でやるのが1番いいというのが個人的な意見である。それでやって、その中に、今調査研究もこれだけ進んで、あるいは色々なお城とかも含めて、史跡整備の今のトレンド、時流はこうであるとか、あるいは熊本城とか名古屋城はどういう状況にあって、どういう風になっているとかを組み合わせれば良いシンポジウムできると思う。NPO法人主催のシンポジウムに市は後援はできるのか。

小林委員：それはできると思う。後援の要領があるので、それに合致すれば、問題ない。

諏訪委員：三の丸ホールはダメか、市が後援だと。

大貫委員：駄目ではないけれど、使用料がかかる。

諏訪委員：無料にはならないか、半額にはなるか。

大貫委員：確認しないと分からない。

岩越委員：毛利さんが書いた本を読んでいて、やはり小林委員が指摘したように、すごくセンシティブで、ボタンの掛け違いがえらく混乱を招くと思う。それは今の時点で

は私は避けたい。だから、もう市がこれならいいというところを、織り込んでいけばいい。別に木造と言わなくても、我々NPO法人が天守木造化を目指しているのは当たり前なわけで、それをあえて言葉に出したりしなければ、小田原城全体の整備を考えていると、我々も。我々が全部木造にこだわっているのかのように思われるよりも、整備の中での木造化をどうするかということは我々の立場としてはあるが、全体としては市と同じ方針だと言えればいい。小田原城の史跡整備をどうしてきたか、その成果をきちんと市民に伝えてもらい、私は、最初に後藤先生が提案した、全体に討論するというので、市が主催するというのが1番いいと思った。

櫻井委員：それもあるし、テーマとして話す内容を考えた時に、これをNPO法人がやるとなると、逆に市民から小田原市は何やっているのだという声が出てくると思う。このレベルのことを小田原市がやらずして、NPO法人がやるのかという話にもなりかねないと、逆に私は思ったりもするが。

後藤アドバイザー：天守だけに絞って木造化ということになるとNPO法人が主催するの話だし、史跡全体の整備の話になると市が主催する方がふさわしいと思う。

小林委員：後藤先生がおっしゃるような形のシンポジウムで、その中で、復元的整備の話の中で、木造の建物とか職人の話とかが折り込まれるのは、あり得ると思う。天守の木造化の話だけになってしまうと、それはシンポジウム全体のテーマからはずれると思う。

後藤アドバイザー：そこは事前に先生に打ち合わせておけばいい。こちらもそれでいいと思う。

鈴木委員：主催は小田原市にして、NPO法人は協力くらいの立場か。

後藤アドバイザー：小田原城に関する調査研究がこれだけ進んでいるという中に、宮本委員が天守の模型の話をするとしたら、発掘の話を入れてもいいと思う。それでカラーがより薄まる。1部が両先生の講演で、1部2部は逆でもいいが、研究が深まっているのはこういう分野があると。最後にトータルディスカッションで全体のことを見て、将来のことをみんなでフリーディスカッションするみたいな感じでいいと思う。

小林委員：今後藤先生がおっしゃられた、その流れはとても綺麗だと思う。市としてもものっかりやすいし、市が主体としてやりやすい。

諏訪間委員：スケジュールを考えないといけない。会場の問題もそうだが、今年度に例えば来年の3月までの中で、市が主催で突っ込むというのは現実的には、現況のスタッフではやはり考えられない。文化財課は、毎年秋、11月には、遺跡展があって、遺跡発表会があって、遺跡講演会があって、その事業をする。それで、年度内には説明板を作って、遺跡のパンフレットを作ると、もうそれは埋蔵文化財

関係の職員がやるが、それにあと、通常の発掘調査があって、発掘調査の報告書があって、多分それでもういっぱいいっぱいである。それに、例えば、そのシンポジウムを企画立案して、調整をして、予算もない中でやるなんて無理である。

岩越委員：それは例えばこちらでその作業をやって、名前だけ市の主催にして、要するに藤井先生は小田原市が主催ということであれば来やすいのであればそうする。だけど、そのマネージメントはNPO法人がやる。だから、全部、市に丸投げではない。

古川委員：シンポジウムの実行をNPO法人に委託してもらおうとか。

小林委員：そんな委託料の予算はとっていない。

古川委員：予算はNPO法人が出す。

鈴木委員：費用はNPO法人で出せる。

岩越委員：費用出すというと問題になるかもしれないが、実質的には人件費だと思う。こういうパンフレットを作ったりなんかするときの。そういうのをNPO法人でやっていけば、最低限チラシ代数万円ぐらいのフライヤーの金額とかでやれるのではないか。何十万円とか、何百万円とかではなくて。

櫻井委員：今年の3月20日に、小田原木造建築推進協議会、環境部でやっている協議会で、木造建築のシンポジウムをやった。その時は、小田原市と木造建築推進協議会、あと建築士会が入って、共催という形にして、基本的にプログラムを全部私が作った。講師の依頼も全部私がやった。お金は建築士会から出している。しかしながら、環境部が一般市民向けに講演をやる時に、講師料として5万円ぐらいかな、何かもらえる制度があるということで、それは環境部がやってくれて、確か5万円ぐらいのお金は環境部から出してもらった。それ以外は全部建築士会が出す形でやった。だから、全てを小田原市にやってもらう形ではなく、我々NPO法人も協力して、費用面も協力して、ただ名前のところは主催の小田原市というのは十分あると思う。先生たちに講師料を渡して、多少の金額になると思うが、そこは少し調べていただければ多少のお金は出せるのかと思う。

諏訪委員：いずれにしても、今、文化財課長もいない。

小林委員：はい、できるなんて、とても言えない。

岡委員：市でやれる可能性を持ち帰って検討するという事。

諏訪委員：持ち帰って個別にこの話をして、全員でも進まないと思う。

鈴木委員：わかった。

古川委員：やる方向で検討してもらって、それで、その中のいろんな諸問題に関しては別途打ち合わせをすることにして、費用の部分に関して講師の部分に関して、NPO法人ができることはこちらでやる。名目をきちっと市がつけるのであれば、市が講師代を出したとすればいい。市が頭になることに関しては、その辺のぐら

いのところでじっくりに考えてもらって、それを検討をしていく。あと、それから、日にちの部分に関しては早めに手を打たないといけない部分もあるので、そこは先にやってもらおうという方向で考えてはどうだろうか。あとはもう課長に判断するしかないだろうから。

小林委員：持ち帰らせてもらう。

鈴木委員：小ホールの空きの可能性ぐらいは、早めに見ておいたほうがいい。

後藤アドバイザー：おそらく、平日の夜だと服部先生は絶対泊まらなないと無理だろうし、藤井先生は東京だから、夜やっても何とかかなと思う。

櫻井委員：会場は、UMECOの会議室1、2、3をぶち抜いてやると100名余だと思う。本当に小ホールでないといけないのか。木造協会で、商工会議所の全会社、つまり三千何社にも声かけて一生懸命集めて、それでようやくこの間、3月20日の時に80名ぐらいだった。非常に面白い内容だった。今回は、すごく学術的すぎて難しいところがあって、一般の市民が現実的な問題として、相当、参加する方もレベルが、それなりの基礎知識がないと多分興味を示さない内容なのかなという感触も出てくる。そうなった時に、会場を小ホール1本絞りでなくて、UMECOの会議室1、2、3にするというのも検討してみてもいいと思ったが、どうか。

小林委員：何人ぐらいの人を呼びたいかだと思う。

後藤アドバイザー：最近のオンライン時代でいうと、オンライン配信ありにすると、講師の先生に録画させてもらったものは後日何かで聞けるようにすると、そんなに大きな会場でなくてもできるというメリットもある。大きなホールでやる場合はむしろ録音も大変だしその場限りになるが、会場と中身によっては、そういう方法もあると思う。うちも大体、小さな会議室にしてオンライン同時視聴ありにして、さらにそれを録画させてもらって、後日何か月間か聞けるようにするみたいな感じでやっている。フレキシブルにそういう方法も考えられる。

櫻井委員：市の施設ではないが、会場としてはあとは万葉が持つてる小田原コンベンションホール、旧ナックビル。収容人数は200人ぐらい。だから、場所は小ホールにこだわらなくてもいいと思う。

岡委員：こだわってない。逆になんでやりたいかだと思う。勉強したいからやるのか、市民に知らせたいからやるのかでやり方違う。その方針に合わせたものをやればいいだけの話である。

諏訪委員：服部先生、藤井先生を呼ぶのだったら、それなりに人もいないとまずいというのは普通に思う。50人というわけにはいかない。

後藤アドバイザー：大きくなればなるほどオンライン配信は難しくなる。相当設備が整っていないと難しい。

櫻井委員：あまり大きな会場を借りすぎてというか、私は今の時点で、2人の先生を呼んで、300人集客というのは、どうやって集客するのかという戦略が見えてこない。これはやっぱり、冒頭にもあったが、このシンポジウムやるというのは、市民に対して、小田原城をまず頭の中に位置づけてもらうというのが1番重要なことだと思う。なるべく多くの市民の方に来てもらいたいというのが基本方針ではあるものの、実際どれだけの人が来るのかは、そこは私は、逆に諏訪委員とかの方がこういった内容でいろんな会議に出て、肌感覚を持っていると思う。その辺のところは、小田原市も多分そういう趣旨であれば、小田原城のことをもっと市民に知ってもらおうという趣旨であれば、多くの方に来てもらいたいというのは同じだと思う。ただ、それが具体的な数字、こういう時は数字を決めないといけないと思う。その目星として本当に300人を集められそうなのか、100人ぐらい集まれば上出来だということなのか、その辺のところは逆に我々も教えてもらいたいと思う。

諏訪委員：この2人で、やっぱり200人ぐらいは来てもらわないと困る。ただ、この2人の知名度は、小田原、神奈川界限ではほとんどないと思う。だから関係者プラスアルファで、土日にやっても100人くらいか。

後藤アドバイザー：100人の会場にしてもらって、オンライン同時配信と録画してもらってやる方が視聴数増えると思う。

古川委員：100人で設定して100人いっぱいになるのがいいかもしれない。

諏訪委員：空きが出るのも結構大変かもしれない。

櫻井委員：実際に感覚的には、100人を集めるのも相当苦労すると思う。だから私も、シンポジウムをやった時は、まずターゲットとして商工会議所という1つまとまったところがあったので、そこに対して基本的に広報をかけて、一般市民向けには市の広報に載せてもらった。このシンポジウムをやるときに、何かそのまとまった団体というか、広告を出せる、そのまとまったところがあるのかということも知りたいし、広告する媒体として、市の広報だけだったらなかなか集まらないのではないかと思う。

鈴木委員：あとは、その時に生で聞くだけではなくて、後で多くの方が録画を見てもらうということがむしろ大事だと思う。

櫻井委員：同時配信と録画するのは、少し難易度が違ってくると思うが、今まで市のこういうイベントで、同時配信みたいなもの、youtube的なやつでやったことはあるのか。

諏訪委員：ある。北條五代祭りの時に、講演会を大ホールでやって、それを同時配信プラスyoutube配信でやった。それなりに予算がかかった。

櫻井委員：録画であれば、別にその場でビデオを回しといて、それを何らかの形で動画をア

ップするということでもいいと思う

岡 委員：北條五大祭りの講演会をやったのは、観光協会だ。

諏訪委員：FM 小田原とかに頼むと何十万円かかる。

後藤アドバイザー：会場が大きければ大きいほど、プロに頼まないとろくなものにならないけど、小さいと素人の ZOOM 録音でも普通にいける。うちなんかでも小さい部屋でやると大体うまくいく。

櫻井委員：1 回、当然持ち帰ってもらわないといけないと思う。ただ、会場がもしも年度内にやることのボトルネックになっているとしたら、そこは外して考えてもらいたい。なるべく我々としては年度内にやりたいというのがある。そこも含めて考えてもらえると嬉しい。

次のに行く。資料のスケジュール表を見てもらいたい。我々がずっとこの検討会議で検討してきた内容が、表という形で、かなり数値的なところ、年代的なところは緩やかに書いてあるつもりだが、まずこれを確認してもらいたい。それで、このスケジュールがあると、我々としては、いろんなものが同時並行で俯瞰して見られるというところがあり、これを随時更新していくことで、プロジェクトマネジメントをするわけではないが、いろんなものの進捗が俯瞰して見られる。そういうことが我々の意思決定にも多分いい効果をもたらすのではないかとということで作った。まずは、この会議で小田原市の協力もあってここまで来たという報告をさせてもらうことと、この内容に関してまだ問題があるのかどうか、その辺りのところをまず見てもらいたい。

鈴木委員：今日は、これの 1 つ 1 つに対して議論をしなくてもいいと思っている。これはこの会議でいろんな議論をしてきたことを見える化しただけのことである。今後、こういう見える化のスタイルを持ちながら、もっとこういう計画をここで入れなければいけないとか、これ順番違ふとかの議論をしながら、時々それをいわゆるローリングで書き直していく。それで、お互いにその課題の並び方とか順番だとかを共有認識をしていけばいいと思っている。これで計画をかつちり作った、これの通り行くというイメージは全くない。我々として課題を把握していかなくてはいけないことを時々ローリングで書き直して行こう、その程度ものである。

櫻井委員：内容を確認してもらいたい。湯浅委員もいないので、ここであまり議論という形にはならないかなと思う。湯浅委員も含めて確認してもらいたい。

後藤アドバイザー：前半の話と絡めるなら、この工程を確かなものにするためには、なるべく毎年 1 回くらいずつシンポジウムを開催して理解を深めていくのが並行でないと思える。いろいろ考えたほうがいいと思う。それは、今言ったような内容だけではなくて、櫻井委員が進めている木で建築を作る事への理解のシンポジ

ウムが、来年かもしれないので、このグループの主催ではないが、そこに乗っかっていくということを含めて、毎年という意味である。

櫻井委員：木造協とも連携ができるといいと思う。

後藤アドバイザー：そう思う。

櫻井委員：後藤先生、またシンポジウムの話に戻るが、さっき私が言っていた、一般市民の関心というか、一般市民のレベルというところがあり、木造協でシンポジウムやった時には、とにかくその建築関係者というよりは、一般の人に木造建築に対して興味を持ってもらおうということに重きを置いてやった。木造で建物を作った有名なのが、浜松磐田信用金庫が、木造および木質化をすごくやっている。これは銀行の頭取の指示でSDGS化というのがあり、ものすごく地元の木を使っている。その浜松磐田信用金庫から、総務部の部長さんに来てもらい、取組を紹介してもらった。なるべく市民が分かりやすい話をするように、また、プロが聞きたい技術的なことの話はしないようにやった。後藤先生の頭の中に、もうちょっとレベルを下げた裾野を広げるという視点で、今後シンポジウムをやろうとなった時に、何かアイデアはあるか。

後藤アドバイザー：さっき言った、公園の中の仮設物に木を使っているとか。それは高校生とかが組み立てたりしている。日建設計がやってる。ああいうのはとても良いと思う。そういう話をきくと、小田原のお城のイベントですぐできると感じるの、それは別の機会にやったらいいと思う。片方は常設の建物で、会社で支店とか工場を作るときに木で考えてほしいみたいな、公共建築はもちろんだが。たとえば、運動会とかで作っている仮設物も、みんな簡易な鉄パイプのテントでやっているが、それをこれくらいの穴を仕込むだけで木できちゃうみたいなものもある。

櫻井委員：日建設計が考えたのは、上につけるのは木でやる前提で作ったのか。

後藤アドバイザー：そうである。木と木は難しい接合は作れないので、それだけは金属や樹脂でクリップ作って、そのクリップを組み合わせると色々な角度とかの仮設物を作れるので、良く考えたなと思う。

櫻井委員：なるほど。それはおもしろい。

岩越委員：今の後藤先生のアイデアだけど、このシンポジウムをやる前に、こういうようなことを作るのなら、柱に貫を通してジャングルジムみたいに作る。それで、子供が組み立てて、子供がそこに乗っかるという事をやっているグループがある。そういうようなものを出して、平日頃の小田原でやっているイベントの中でまず木造に触れる。お城の中でやるイベントには必ずなんか木造パフォーマンスが、木のパフォーマンスがあって、これはなんだと興味を積み重ねてシンポジウムに持っていけないと。確かに専門的な知識が飛び交い、もうほとんどニッチな人だけ

しか来なくなる。全国にはいるが、小田原市にどれだけいるのかと言ったら10人か20人くらいか。その話題のために、今言った木を使ったイベント企画は、それはすごく必要なことだと思う。

後藤アドバイザー：小田原の木材の間伐使用みたいな話は昔からあるから、そういうものの幅を少し広げていけばいいと思う。「くむんだー」の現代版みたいな感じである、日建設計のものは。

櫻井委員：少し話を戻して、集客のことだが、この会議でやっていることの広報という意味で、例えば田代先生がやっている会とか、そういうところにもお知らせをして、シンポジウムにも来てもらう。それと同時に、他にもそういう団体が多分あると思うので、まずはそういう、どういう団体があるかというのを教えてもらうことはできないかなと思う。できれば、ここで話している内容、特にこのシンポジウムに関しては、そういうところにお声がけをするのも集客の手口と思うが、いかがか。

小林委員：お知らせするのはいいとは思う。

櫻井委員：その辺で何かリストみたいなものを持っていないか。

小林委員：特に市で、団体とかに直に通知を出したりとか、そういうのはしてない。やるとしたら、小田原ガイド協会に、こういうのがあるのでみなさんにお知らせしてほしいというぐらいか。

櫻井委員：やはり小田原城という非常に重要なものに関わるイベントなので、我々と同じような民間で小田原城を考えるような団体があれば、そういうところには、やはり漏れなく周知はした方がいいと思う。例えば諏訪間委員でもご存知のところがあれば、会の名前だけでも教えてもらえると助かる。

鈴木委員：我々としても、そのイベントに招待するだけではなくて、これからもっとそういう団体と共用の体制を作っていかなければいけないと思っている。

小林委員：田代さんはNPO法人のメンバーになっているはず。

鈴木委員：なっているが、田代さんは、天守だけを考えるのではなく広範囲な城跡をしている団体も率いていられる。そういうそれぞれの団体の目指すところを我々も十分吸収していきたいと思っている。それによって、それぞれの団体に対するアプローチの仕方も考える必要があると思っている。例えば、天守は別にいいんだと、大手門が先だみたいな方もいる。色々な考え方を持っている。その把握をしておきたい。

櫻井委員：そういうことで、それは我々からのお願い事ということで話をした。そうすると、このシンポジウムに関してどういう進め方をしたらよいか。まずは小林委員が湯浅委員と相談してもらって、我々に連絡もらい、その上で、我々としては前向きな答えが得られるということを前提で、全体でやるというよりは少人数でや

るということで、別途日程を調整させてもらうという形でよいか。

鈴木委員：早めに我々のほうも動いて、何人かでお邪魔して作戦会議できるようにしたい。

櫻井委員：そうすると、この検討会議の次回は、例えばもう年明けとかというような形でいいか。日程は別途調整する。近々にはやらないということによいと思う。

鈴木委員：例の東博模型の調査は、どうなっているのか。

小林委員：東博模型の調査は、正式に依頼文を郵送した。

鈴木委員：大体どんな時期になるか。

小林委員：県博が休館にならないとできない。

鈴木委員：もうそれ、決まっているのか。

岡委員：大体年明け、年明けから年度末ぐらいである。

鈴木委員：東博模型の調査がある程度終わった辺りで検討会議やると、スムーズで発展的な話もしやすいと思う。

岡委員：工事があるので休館日が決まるが、あとはその工事業者が決まらなないと、調査の日程が組めない。工事の段取りがあるから。そういうところで、どのあたりが1番可能なのかというところは、今後詰めないといけないと思っている。

櫻井委員：県博は、何の工事をするのか。空調の入れ替えとかか。

岡委員：エレベーターとか色々である。あとは、具体的に本当に細かいところの話になるので、期間はもちろん工期とかもそうであるが、その中でどこが1番可能なのかというのは、細かく決めてこないで調査の日程は決まらない。

櫻井委員：そうすると、進捗を連絡してもらおうということをお願いしたい。あともう1点、この名簿だが、辻村委員は我々の会の副理事長になっている。副理事長は2名体制である。今までもずっと2名だったが、高橋空也委員の父上が副理事長だったが、交代して辻村委員が副理事長になった。

小林委員：分かった。名簿を更新しておく。

櫻井委員：お願いする。本日はこのぐらいでいいか。

岡委員：調査に向けて、あと具体的な機材とか色々出しているが、本当に必要な日数とかをこちらで詰める。

鈴木委員：宮本委員は、今日、今ここで皆さんに報告共有しておくことはあるか。

宮本委員：特にはない。

櫻井委員：我々の方から以上である。

小林委員：それでは色々話があったが、とりあえず第1回目はこれで締める。第2回目は、追々日程をつめていく。大体おおよその目途としては年明けどこかぐらいのイメージか。

櫻井委員：第2回目の日程を決めるのに多分重要なファクターになってくるのが、東博模型の調査だと思う。なので、その時期が決まって、それがどのぐらい進捗したぐ

らいのところがいいと思う。勘案しながら決めるのがいいと思う。

小林委員：NPO法人がこのぐらいでやりたいといった形になると思う。調査の進展はこちらからも伝える。これで今回は終わる。ありがとうございました。